

中最頂飾造社宮恒有四隅以丹青石立其四面石高一丈八尺許廣三尺厚一尺餘立石之門相去一尺中有一重高閣以石構營彩色美麗不可勝言望諸齋祭兼預官社從之

〔古史傳神代〕貞觀七年の大燒有し後延喜以前までは煙立しと見えて伊勢家集に人しれず思するが、富士のねは我がごとやかくやとあり絶ず燃らむ、はては身の富士の山とも成ぬるか燃るなげきの煙たえねばなど詠み古今集の序にも富士の煙によそへて人をこひ云、同道集に人知らず思を常にするがなる富士の山こそわがみなりけれ、又君と云ばみまれ見す、また富士のねのめづらしげなく燃るわが戀、又富士のねのならぬ思にもえばもえ神だにけたぬれりけり、など數知ず多く竹取物語の末條にも其烟未雲の中へ立登とぞ云傳たると記せるをも思べし、さて或人は此物語なるかくや媛も此山と書つれど下文に今は富士の山も煙立すなりと有を思に是頃既に煙絶たり、然るに日本紀略に朱雀院天皇承平七年の所に十一月某日甲斐國言、駿河國富士山神火埋水海と云事有ば、是より復煙立けり、玄道云、道雄説に、此時に埋しは下吉田村の上方富士の山腹に胎内と稱大穴有て、其邊より押出たる焼石夥く、下吉田と舟津村の間は一面の焼石なる所有り、舟津より川口まで一里の舟渡有所なるが、此より東に此海口有しを埋たる故に、水の落方なし、地中より伏流して相模國馬入川の水源山中海より出る桂川に涌出と云、又山中海明日見海も元川口と一なりしを埋みて、かく三と成し者ならむと委く説り外記日記に、一條天皇長保元年三月七日、駿河國言上せる解文を載て、日者不字御山燒、由何崇者、即申云、若恵所有兵革疾疫事歟者とあり、此治安元年より二十三年許前之事なり、又紀略に、後一条天皇長保三年二月十六日富士山火起自峯トニ至山脚、又扶桑略紀永保三年二月二十八日癸卯條に、有富士山燃恵コラヒとも見ゆ考合ベシ。

其は更科日記に、其山の状いと世に見えぬ状なり、状異なる山の姿の紺青をぬりたる様なるに、雪の消る世もなく積りたれば、色濃絹に白きあこめ衣たらむやうに見えて、山の嶺の少平たるより、煙は立チ上る、夕暮は火の燃立も見ゆと云るにて知べし。更科日記は、菅原孝標朝臣女ノ記にて、治安元年父朝臣に上テれし時の道記なり、然るを十六夜日記に、富士の山を見れば煙も立す、昔父の朝臣に誘れて、いかに鳴海の浦なればなど詠し頃遠江の國までは見しかば、富士の煙の末も朝夕たしかに